

情報の認識・取得・活用における ADHD 者の困難の体験に関する研究 —ADHD 者のための情報保障に向けて—

佐藤 碧

発達障害は操作的診断基準を用いて診断がなされるという特性上、同一の障害の診断をもつ当事者間でもその症状や特性は多様である。こうした定義や概念における曖昧さをもつ発達障害に関して、その当事者に支援を行う際には、テーラーメイドな支援や環境調整が有効である。2024 年 4 月発達障害者差別解消法の改正と施行により、事業者に対しても合理的配慮が義務化された。これにより、より広く多様な場面において支援が求められるようになり、障害者支援における新たな課題が発生することが予想される。また現在、発達障害に関する情報保障の研究や取り組みは非常に限定的であり、特に ADHD 者のための情報保障研究が不足している。これらの現状を踏まえ、本研究では、ADHD 者のためのテーラーメイドな支援としての情報保障のあり方について探求することとした。

本研究の目的は、ADHD 者の情報認識・取得・活用における困難について調査し、ADHD 者のための情報保障のあり方を探求することである。特に、ADHD 者の情報認識・取得・活用の困難の過程における体験の詳細や、その内的感覚に迫ることを目指している。

本研究は 2024 年 4 月から 12 月にかけて行った。ADHD の診断をもちその他の発達障害の診断を持たない大学生・大学院生 9 人を対象とし、半構造化インタビューによる質的調査を行った。

本研究では、ADHD 者が情報の認識・取得・活用の場面において多様な困難を抱えており、それらは五感を通して受け取る刺激に対するしんどさの感覚から、意識（集中）のコントロールにおける困難、情報の構造や全体像を把握することの困難に至るまで、さまざまな領域に分布していることが明らかになった。また、それらの困難が互いに組み合わさったり影響しあったりすることで、一つの「できなさ」（タスク遂行の困難感）を形成していることが明らかになった。また、ADHD 者の困難の体験と ADHD の診断を持たない人との体験は、感覚、程度、頻度などの点において違いがあり、さらに、ADHD 者が抱える自身の感覚に対する「言葉にできなさ」により、それらの違いを表現し伝えることが難しいという状況があることが明らかになった。また、ADHD 者の困りは環境や使用する媒体、情報提示の方法などの多様な外的要因に影響を受けており、環境・媒体の調整や適切な方法での情報提示などにより、それらの困難を一部予防・軽減することが可能であることが明らかになった。また、一つの「できなさ」への複数の困難の影響や、ADHD 者の「言葉にできなさ」を踏まえ、情報保障においては対話を通して一人ひとりの状態を注意深く分析し、背景にある言葉にできない感覚や多様な困難を踏まえた支援を行うことが必要であることが明らかになった。

(指導教員 照山 絢子)